

## 4. 水害と治水事業の沿革

### 4-1 既往洪水の概要

常呂川流域では過去に以下に示す洪水が発生している。

表 4-1 既往の主要洪水の概要

洪水発生年月日	気象原因	流域平均 48時間雨量 北見地点(mm)	北見地点流量 (m <sup>3</sup> /s)	被害等
大正 11 年 8 月	台風	182.1	1610(推定)	被害家屋(戸) 1093 氾濫面積(ha) 2160
昭和 46 年 10 月	低気圧	60.6	261	被害家屋(戸) 24 氾濫面積(ha) 411
昭和 50 年 8 月	台風	153.2	661	被害家屋(戸) 349 氾濫面積(ha) 494
昭和 50 年 9 月	低気圧・前線	76.7	508	被害家屋(戸) 1060 氾濫面積(ha) 1111
昭和 54 年 10 月	台風	101.6	586	被害家屋(戸) 277 氾濫面積(ha) 592
昭和 56 年 8 月上	台風	113.3	390	被害家屋(戸) 0 氾濫面積(ha) 2072
昭和 56 年 8 月下	台風	43.7	150	被害家屋(戸) 8 氾濫面積(ha) 1070
平成 4 年 8 月	台風	88.8	364	被害家屋(戸) 6 氾濫面積(ha) 352
平成 4 年 9 月	台風	94.6	671	被害家屋(戸) 26 氾濫面積(ha) 4585
平成 10 年 8 月	前線	126.0	635	被害家屋(戸) 11 氾濫面積(ha) 0
平成 10 年 9 月	台風	101.4	898	被害家屋(戸) 8 氾濫面積(ha) 0
平成 13 年 9 月	台風	175.0	932	被害家屋(戸) 2 氾濫面積(ha) 1037

注 1) 被害家屋及び氾濫面積は昭和 23 年以前は「水害」、昭和 54 年以降は「北海道災害記録」による。

注 2) 北海道災害記録による被害等は集計上、支川、内水被害を含む。北見市の被害は流域外も含む。

## 4-2 主な洪水の概要

主な水害は以下の通りである。常呂川の既往最大は大正11年8月洪水である。

表 4-2 主な洪水の概要表 被害実態(1)

洪水発生年月	被害の概要
大正11年 8月洪水	<p>8月下旬から降雨つづきのところへ、24日にたつて台風が根釧国境を通過して、オホーツク海へ抜けたため豪雨となり、翌25日にかけて全道的に河川が氾濫、大災害となった。</p> <p>「北海道地域防災計画」より 全道で死者117名、浸水家屋21,597戸、同流失872戸、田畑87,975ha、同流失646ha、損害額2,715万円</p> <p>「置戸町史 戦前編」より 降水量・北見283.9mm、家屋流失21、同浸水1,093戸、橋梁流失37箇所、田畑浸水2,160ha</p> <p>「新留辺蘆町史」より 無加川をはじめ各河川が氾濫し、橋梁流失、道路決壊、畑地冠水などの大水害を生じた。町は災害復旧のため8月27日及び9月20日に町会を招集、災害関係の議案を上程した。町議会はとりあえず主要三橋の復旧計画を立て、この促進を期したが財政措置上から緊急着工に至らず、ついに同年12月28日町会を招集し、一時借り入れ5千円の議決を取り、銀行融資を受ける一方緊急を要する武草橋水害復旧工事について、工事費14,554円をもって留辺蘆元部落住民一同と工事随意契約の書面議決を採って、工事に着手した。このほか一糸橋、二糸橋共に道費補助、町費、受益者の寄付金でいずれも架橋された。</p> <p>「新端野町史」より 大正11年8月23日からの豪雨は、常呂川水系の河川を氾濫させ、流域は泥沼と化した。この洪水で、鉄橋下手から一区にかけて常呂川の河心が変わり、肥沃地200町歩が流失し、新しい川(新川)ができた。 網走支庁管内における浸水家屋数は4,400戸、流失家屋数は65戸、田への浸水・流失面積は241町歩、畑への浸水面積は13,586町歩(うち収穫皆無1,801町歩)、畑の流失面積も1,482町歩に達した。</p> <p>「続訓子府町史」より 大正11年8月23日午後3時から300ミリの豪雨、9月にも大雨が降って、3度の洪水に見舞われ、被害の手当てが行なわれないうちに洪水を重ねたため、妻恋橋、大谷橋、三十号橋などを流し、道路、堤防、農作物の損害10万3千円、決壊した田畑132町8反歩に及んだと記録されている。(常呂川流域97町1反歩、ケトナイ川流域11町歩、シルコマベツ川流域10町7反歩、クネネツ川流域14町歩)この水害で唐武士野新兵衛ら12戸、東訓田島作松ら4戸、南訓宮崎九朗丸ら3戸、中ノ沢森谷常蔵の計20戸が戸数割の免除を受けている。</p> <p>「常呂川百年史」より 建物浸水4,400戸、流失227戸、死者11人、家畜死1,116、耕地被害水田浸水237町歩、流失2町歩、畑浸水13,450町歩、流失1,467町歩</p>
昭和10年 8月洪水	<p>8月29日東北地方に達した低気圧は、さらに東北に進行して本道の南部を通過し、30日は根室沖に滞留したため、この低気圧の通過区域にあたった空知、胆振、十勝、釧路、網走の各支庁管内は、29日より30日にかけて暴風と大豪雨に襲われ、降水量は帯広105mm、釧路100mm、網走157mmの多きに達した。</p> <p>「北海道地域防災計画」より 空知、十勝、網走の4支庁、45町村で死者14名、家屋7,443戸のうち浸水2,074戸、被害総額430万6千円</p> <p>「置戸町史 戦前編」より 降水量・北見81mm(29日)、北見家屋浸水、常呂川の堤防決壊</p> <p>「新端野町史」より 6月8日と8月30日の2回の水害で仁頃川、常呂川の氾濫により麦類、薄荷などを中心に合わせて277町4反(約274.6ha)が被害を受け、約4万2千円の損害を出した。 8月29日午後8時ごろから30日午前4時ごろまでの豪雨で30日午前9時ごろから常呂川及び仁頃川で出水が始まり、午後3時になると水位が2.6メートルに達して沿岸耕地に流入し、浸水による腐敗等のため流域農地一帯の水田8.7町歩が収穫皆無となり、畑219町歩が4～8割の減収となった。</p>
昭和14年 8月洪水	<p>昭和14年8月15日から17までの3日間、台風による暴風雨が北見地方を襲い大きな被害をもたらした。雨量は、野付牛(北見)で64mm、佐呂間で110mmであったが、風をももった関係で出水がはやく、常呂川をはじめ網走管内の各河川が氾濫した。</p> <p>「北海道地域防災計画」より 北見地方で死者1名、家畜51頭、家屋流失22戸、浸水1,262、田畑流失3,300ha、被害額85万6千円</p> <p>「置戸町史 戦前編」より 降水量・北見64mm、佐呂間110mm(15～16日)、死者1名、家畜喪失51頭、家屋半壊流失22、床上浸水229、床下同1,033戸、田畑浸水流失3,300ha、被害額85万円</p> <p>「新端野町史」より 4月23日から30日にかけて融雪による常呂川、仁頃川などの氾濫で田15町(約14.9ha)、畑80町(約79.2ha)にわたって表土流失、砂礫の地中沈下などの被害を受けた。このため薄荷、小麦など55町(約54.5ha)に1万5百円の被害が発生した。</p>
昭和22年 9月洪水	<p>カスリン台風による暴風雨。</p> <p>「北海道地域防災計画」より 全道で行方不明1、死10、家屋倒壊33、流失20、浸水7,288戸、田畑冠水7,261ha、橋流失194、堤防欠壊75</p> <p>「続訓子府町史」より 本町でも昭和22年9月の豪雨で、前年よりやく復旧したばかりの居武士橋の橋脚の一部が流失したが、このような場合、復旧できぬまま放置して仮橋で間に合わせたり、地域住民の手でかろうじて復旧するにとどまった。</p>
昭和32年 5月洪水	<p>昭和32年5月20日から21日にかけて本道南方を通過した低気圧は、網走管内に大雨をもたらし、北見で82mm、網走66mm、佐呂間143mmに達し、常呂川・網走川・佐呂間別川・芭蕉川などが氾濫した。</p> <p>「北海道地域防災計画」より 北見地方で常呂川他が氾濫、浸水家屋260戸、田畑冠水1,000ha</p> <p>「置戸町史 戦後編」より 緑橋上流左岸決壊200m</p> <p>「続訓子府町史」より 昭和32年5月20日から21日にかけて大雨があり、常呂川が氾濫した。しかし、本町の被害状況はあきらかでない。</p> <p>「新端野町史」より 5月20日～25日の降雨で常呂川、仁頃川氾濫し農地冠水・流失260町歩、橋流失3、道路欠損5。</p> <p>「常呂町百年史」より 32年5月22日には大雨で水位が2.6mも上昇、昭和11年以來の増水で川口堤防の一部が決壊、福山愛林小貴橋が流失した。</p>

表 4-3 主な洪水の概要表 被害実態(2)

洪水発生年月	被害の概要
昭和37年 8月洪水	<p>7月下旬以来、北日本付近に停滞していた梅雨前線の北上によって、8月2日夜半から全道的に強い雨が降り続き、台風9号の接近にともなって雨量はさらに増大し、とくに、後志、石狩、空知および上川南部は集中的な豪雨となり、その最高雨量は、後志地方においては358mmを記録した。このため、石狩川、空知川をはじめ、各地の大小河川が増水氾濫し、さらに8月9日には台風10号による降雨が道南一帯及び道央の一部にあって、両台風により各地に大きな被害が発生した。</p> <p>「水害統計」より 浸水面積：3151.0ha 建物被害：125棟</p> <p>「北海道地域防災計画」より 全道で行方不明35、傷39、全壊家屋163、流失375、半壊1,358、床上浸水16,373、床下浸水32,372、非住家破壊18,315戸、田畑被害240,909ha、河川2,712、道路1,072、橋564カ所欠壊、漁船40、漁港施設104件被災、その他、被害総額75,883,133千円(一部10号被害含む)</p> <p>「新留辺蘆町史」より 本町の橋梁流失、河川堤防決壊、農作物の流失被害など膨大な額に上った。流失橋梁に対する災害復旧工事は、同年9月21日召集の町議会で施行議決がなされ、「台風9号災害公共土木工事特別会計」を設定、歳入財源に国庫支出金1,600万円、一般会計繰り入れ226万八千円、町債450万円、合計2,376万8千円を計上した。</p> <p>「続訓子府町史」より 常呂川流域の雨量は、本町で98mmに達し、本町で、農地943.2ha(水田15ha、畑928.2ha)床上浸水1戸、床下浸水23戸、24世帯、125人が被害を受け、河川堤防4カ所が決壊、道路1ヶ所が壊れ、総額で3,400万2千円の損害を出した。</p> <p>「新端野町史」より 8月4日の台風9号の影響で、田畑166ha冠水を含めて被害面積2,268haの農作物に被害をもたらす。農作物被害金額2,328万円。</p> <p>「常呂町百年史」より 37年8月3日には台風9号の襲来で、常呂町では、被災総面積2,521.4ha、(その中水田41.5ha、畑2,479.9ha)、床上浸水44戸、床下浸水8戸、被災人口302人、道路及橋梁2カ所、被害総額2億6,759万4,000円に達する被害を受けた。</p>
昭和50年 8月洪水	<p>22日夜半すぎから北海道に停滞していた前線は、台風6号が八戸の東海上に達した24日零時頃からやっと南東に移動し始め、24日9時には北海道の東海上に去った。強い雨域はこの前線の移動によって道東に移ったので、西部では早朝、東部でも午前中にはほとんど雨が止んだ。台風6号は24日6時釧路の南東海上で温帯低気圧となり、9時には1,000ミリバールに衰えた。このため北海道では風はあまり強くなり、風による被害はほとんどなかった。したがって、今回の台風6号は両台風ということが出来る。</p> <p>常呂川流域においてももっとも雨が早く降り始めたのは、上無加・留辺蘆における23日7時で、遅いのは置戸・常呂での23日14時～15時であり、1時間最大雨量は釧山での193mm、置戸の187mmが多く、流域平均雨量は134.5mmとなっている。</p> <p>「水害統計」より 浸水面積：442.9ha 建物被害：527棟</p> <p>「災害記録」より 浸水面積：494.0ha [常呂町・置戸町] 住宅被害：349棟</p> <p>「北海道地域防災計画」より 全道で交通関係・国鉄運休1,271本以上、主要道路不通または通行止。建物・住家全壊34、半壊、一部破壊53、非住家全壊2棟、浸水家屋・床上6,294、床下16,503、農業・農耕地冠水51,407、埋没1,016、海難・漁船沈没1、人身事故・死者、行方不明など12、負傷者7。電力関係・電柱折損39、停電4,000。土木関係・道路冠水、損壊など602、がけ崩れ136、堤防決壊63、鉄道冠水29、橋流失83。その他・回線障害86、家畜被害940万。</p> <p>「置戸町史 戦後編」より 台風6号によりイモ、玉ネギ等の農作物に被害(226ha、1億3,395万円)を受けたほか、住宅全壊1、床上浸水42棟、床下浸水142棟、非住宅で全壊11棟、半壊5棟、河川23ヶ所、道路20カ所、橋梁10ヶ所、公共施設1ヶ所、農地被災面積309haの被害。</p> <p>「新留辺蘆町史」より 住家被害、床上浸水6棟、7世帯、20名、床下浸水27棟、50世帯、159名、畑の冠水は123ha、流失・埋没は37haで、被害総面積は160haに及んだ。土木被害の主な被害では河川7カ所、その他小さな被害を入れると40カ所あまりで、被害金額は合わせて約5,100万円に上った。</p> <p>「続訓子府町史」より この大雨災害で訓子府町は、床上浸水90戸(360人)、河川堤防2カ所道路及び橋梁2カ所、合計2億2,600万3千円の被害を出したが、この時叶橋の橋脚が流れ、</p> <p>「新端野町史」より 8月23・24日、台風6号に伴う大雨で農地冠水流失等のため農作物に被害のほか、二区地区で住居の床下浸水、道路損壊などの被害</p> <p>「常呂川百年史」より 台風6号では、田畑被災280ha、浸水12戸、48人、被害額8,692万5,000円の被害。</p>
昭和50年 9月洪水	<p>昭和50年夏の亜熱帯高気圧は、例年になくその勢力が強く、9月には入っても一向に衰える様子を見せず、本州から北日本方面まで張り出していた。一方、オホーツク海北部には冷たい高気圧が現れ、南に張り出し停滞していた。これら2つの高気圧の間に位置する北海道は前線が停滞しやすい場となった。この前線は北海道の中央部をほぼ東西に横切って停滞したが、この前線上を1～2日ぐらいの短い周期で、亜熱帯高気圧の周辺を回る暖湿気流が北海道に流入したため、大気の成層状態が不安定化し、前線活動が活発になった。このように北海道に大雨が降りやすい気象状態は9日朝まで続いた。</p> <p>「水害統計」より 浸水面積：496.1ha 建物被害：34,544棟</p> <p>「災害記録」より 浸水面積：1,111.0ha [端野町・北見市・訓子府町・置戸町・留辺蘆町] 住宅被害：1,060棟 [常呂町・端野町・北見市・訓子府町・置戸町・留辺蘆町]</p> <p>「北海道地域防災計画」より 全道で交通関係・国鉄運休834本、主要道路不通。建物・全壊15、半壊31、非住家全壊13棟。浸水家屋・床上632、床下3,862。農業・農耕地冠水16,552、埋没644、農作物冠水27。海難・漁船破損4、人身事故・死者2、負傷者7。土木関係・道路冠水、損壊等414、がけ崩れ46、決壊・護岸4、堤防23、鉄道冠水98、橋流失65、その他、回線障害3、断水事故。</p> <p>「置戸町史 戦後編」より 8日より9日までに108mmを記録し、住宅で全壊1、床上浸水35棟、床下浸水157棟、非住宅で全壊2棟、半壊1棟、河川4カ所、道路69カ所、橋梁2カ所、公共施設8カ所、農地等被災面積230haの被害</p> <p>「続訓子府町史」より この大雨災害で訓子府町は床上浸水3戸、床下浸水88戸、被害人口360人、家屋半壊1戸、被害農地244ha(田26ha、畑218ha)、河川堤防決壊3カ所で被害総額は3億1,696万7千円に達した。</p> <p>「新端野町史」より 9月8日から9日にかけての94mmの集中豪雨で常呂川・仁頃川が氾濫し、流域の農地冠水、農作物被害のほか道路損壊等の被害</p> <p>「常呂川百年史」より 大雨では、被災農地419ha、浸水11戸、被害額1億9,126万6,000円を生じた。</p>

表 4-4 主な洪水の概要表 被害実態(3)

洪水発生年月	被害の概要
平成4年9月洪水	<p>北海道付近に停滞している前線が活発となり、また、9月10日午後3時現在、八丈島の東約410kmにある大型で強い台風17号は、勢力を保ちながらさらに北上を続け、9月12日0時には国後島付近を通過しオホーツク海へ抜けた。網走地方気象台は、9月11日12時50分網走、北見地方に大雨洪水警報、さらに11日19時30分紋別地方にも大雨洪水警報を発令した。その後も強い雨が、継続的に12日早朝まで続き、降り始めからの総雨量は、網走(気)214mm、津別(開)170mm、美幌峠(開)191mm、上川沿(開)161mm、北見(開)123mm、中湧別(開)129mm、上着清(開)111mmとなった。</p> <p>「水害統計」より 浸水面積：2485.6ha 建物被害：27棟</p> <p>「災害記録」より 浸水面積：4584.6ha [常呂町・端野町・北見市・訓子府町・置戸町・留辺苅町] 住宅被害：26棟 [常呂町・北見市・留辺苅町]</p> <p>「続訓子府町史」より ポイントナイ川が決壊、道路が冠水した。しかし住宅の浸水を免れ、辛うじて危機を脱した。オロムシ川は危険水位に達したが、消防署員と団員が出動、つかえた流木を流して決壊を防止した。シルコマンベツ川では、川辺の牛舎への流水の浸食があり、同舎の半壊をみた。この水害によって、農作物の流失・冠水、農業施設の損壊、土木被害など、被害総額が2億5,900万円に達した。</p>
平成10年8月洪水	<p>日本の東には湿った太平洋高気圧、西には大陸の冷たい高気圧があって日本付近は深い気圧の谷の中に入り、日本列島に沿って発達した前線が停滞した。また、25日から北緯24度付近を発達しながら東進した台風4号は、27日には中型で強い台風となって東経140度付近で北上をはじめ、前線の活動はさらに活発となった。北海道では活発な前線は27日から30日にかけて太平洋岸からオホーツク海を機切ったかたちで停滞した。このため、網走管内では27日夜から雨が降り始め、28日朝5時から29日朝9時にかけて断続的に強い雨が降り、28日15時50分に紋別地方に大雨洪水警報が、28日19時30分には網走・北見地方にも大雨洪水警報が発令された。その後も台風4号は東経140度付近をゆっくりと北上し、前線も30日まで以前として太平洋沿岸に停滞したが、前線が太平洋沖に東進したため網走管内では29日10時から雨は小降りになり、29日12時40分には大雨警報が解除され、17時10分には洪水警報も解除された。降り始めの27日19時から29日24時までの総雨量は、チミケツ山で147mm、北見で125mm、網走で118mm、常呂で134mm、佐呂間で138mm、生田原で128mm、斜里で144mmなど網走管内東部で大雨となった。</p> <p>「水害統計」より 浸水面積：0.2ha 建物被害：10棟</p> <p>「災害記録」より 住宅被害：11棟 [常呂町・北見市・置戸町・留辺苅町]</p>
平成10年9月洪水	<p>平成10年9月16日午前4時ごろ静岡興御前崎付近に上陸した台風5号は、関東地方を北上し、16日正午ごろには仙台市付近を通過し、いったん三陸沖海上に出た後、16日午後8時すぎ釧路市付近に再上陸した。その後は北北東に進路を進め16日深夜に根室沖の海上に抜けた。常呂川流域においては、下流域の上川沿で72mm、中流域の北見で92mm、上流域の置戸で127mmの大雨となった。この豪雨により河川は急激に増水し、中流域の北見や下流域の上川沿の各観測所で洪水水位が警戒水位を超えて計画高水位に近づいた。</p> <p>「水害統計」より 浸水面積：2.1ha 建物被害：12棟</p> <p>「災害記録」より 住宅被害：8棟 [常呂町・訓子府町・置戸町・留辺苅町]</p> <p>「北海道地域防災計画」より 全道で死者2名、重傷者3名、軽傷者2名、家屋被害1,100棟、被害総額40,396,892千円。</p>
平成13年9月洪水	<p>北海道に停滞していた秋雨前線が、台風15号の接近に伴って活動が活発となり網走、北見、紋別地方では広範囲にわたって200mmから280mmの大雨となった。10日から北海道付近に停滞していた秋雨前線の影響で、雄武や興部など北部では10日の早朝から雨が降り出していた。秋雨前線は10日の夕方には徐々に南下を始めため、雨の範囲はオホーツク海側一帯に広がり、台風15号からの暖湿気流によって前線の活動は更に活発化した。台風15号は11日の午前9時ごろに神奈川県鎌倉市付近に上陸し、夜には再び宮古市付近から太平洋に進んだ。その後徐々に速度を上げて12日朝には釧路市の南東海上を通過して、午後3時に千島近海で温帯低気圧に変わった。これら、秋雨前線と台風15号の影響で、管内では3日間に渡って雨が降り、ピヤシリ山で279mm、滝上242mm、藻別233mm、網走でも211mmなど各地で200mmを超える大雨を観測した。</p> <p>「水害統計」より 浸水面積：88.1ha 建物被害：1棟</p>

出典

- 「水害統計」国土交通省河川局
- 「災害記録」北海道
- 「北海道地域防災計画」平成14年3月発行 北海道防衛会議
- 「置戸町史 戦前編」昭和60年8月発行 置戸町
- 「置戸町史 戦後編」昭和62年12月発行 置戸町
- 「新留辺苅町史」昭和60年3月発行 留辺苅町
- 「続訓子府町史」平成10年発行 訓子府町
- 「常呂町百年史」平成元年3月発行 常呂町
- 「新端野町史」平成10年10月発行 端野町

### 4-3 治水事業の沿革

明治 31 年、北海道庁内に治水調査会が設置され、常呂川は大正 2 年に 3 ヶ所の水位観測所の設置とともに河川調査が行われた。設計調査は大正 4 年より実施され大正 11 年に終了している。

大正 8 年、常呂川治水事業は道会を通過し大正 9 年帝国議会の協賛を得て、大正 10 年度より起工の運びとなった。この第一期拓殖計画期の工事により、下流部は堤防がほぼ完成し、予期以上の成果をあげた。しかし、洪水量の激増により設計の改訂を要した。また、大正 8 年 9 月の洪水実績をもとに、河口における計画高水流量を 1,391 m<sup>3</sup>/s(50,000 立方尺/秒)として治水計画を樹立した。

昭和 28 年、常呂川改修総体計画が取りまとめられ、昭和 32 年に昭和 33 年度移行改修総体計画立案のため、大正 11 年 8 月 25 日の降雨量からの流出量と北見地点での洪水痕跡から計画高水流量は 1,500 m<sup>3</sup>/s と決定された。現在は昭和 43 年一級河川指定に基づき、工事実施基本計画が決定され、鹿ノ子ダムの調節量を考慮し、計画高水流量を 1,600 m<sup>3</sup>/s とし事業が進められている。

昭和 2 年、第二期拓殖計画の樹立にあたり、本工事の従来の実績、ならびに大正 11 年 8 月の洪水実績をもとに、河口における計画高水流量を 2,086 m<sup>3</sup>/s(75,000 立方尺/秒)に改定した。

その結果、築堤盛高の増高、工事施行区域の拡大等、既定設計の変更、拡張を必要とするに至った。しかし、下流部の工事に主力が注がれたため、上流部は応急的に行われた工事の後始末的な堤防工事の仕上げが施行されたにすぎなかった。

その後、常呂川総体計画の立案にあたり、昭和 32 年に計画を見直し、北見における計画高水流量を約 1,100m<sup>3</sup>/s から 1,500m<sup>3</sup>/s にした。

その後、昭和 40 年の河川法施行を受け、昭和 43 年に北見地点で基本高水流量を 1,900m<sup>3</sup>/s、計画高水流量を 1,600m<sup>3</sup>/s とし、300m<sup>3</sup>/s を洪水調節施設により調節する工事実施基本計画を策定し、河道の掘削、

堤防の新築及び拡築、護岸設置等を実施してきた。

また、この計画に基づき、昭和 50 年に鹿ノ子ダムの建設に着手し、昭和 58 年に完成させた。

その後、河道掘削等を継続してきたが平成 4 年 9 月洪水や平成 13 年 9 月洪水等で大きな被害を受け、以後、現在まで築堤の完成化や河道掘削等を実施している。

表 4-5 治水事業年譜

関連事業	年代	治水史	
北海道第1期拓殖計画 (明治43年～昭和元年)	1889 (M22)	常呂川河口の渡船を廃止し、木橋架設	
	1896 (M29)	河川法公布	
	1898 (M31)	全道的に大洪水(常呂川氾濫し下常呂原野泥海と化す)	
	1900 (M33)	拓殖10年計画が道会において可決され、常呂川の治水事業費が計上された	
	1907 (M40)	網走土木派出所が設置	
	1913 (T 2)	常呂川の平面測量を開始(大正7年完了)	
	1918 (T 7)	常呂川治水計画を樹立	
		釧路川常呂川治水事務所を釧路市に設置	
	1921 (T10)	常呂川治水工場を建設 常呂川治水工事着工され、常呂村左岸築堤工事に着手	
	北海道第2期拓殖計画 (昭和2年～昭和21年)	1928 (S 3)	下流部常呂左右岸築堤、常呂市街裏護岸工事を完了
1930 (S 5)		上流部の治水工事の測量を開始	
1934 (S 9)		本道河川に河川法が適用され、常呂川も認定河川となる	
1949 (S24)		常呂川北見改修事業所が設置される	
戦後の空白時代 (昭和22年～昭和26年)	1951 (S26)	北海道開発局が発足、網走開発建設部が設置される	
	1953 (S28)	北見左岸築堤が完成	
第1期北海道総合開発計画 (昭和27年～昭和37年)	1956 (S31)	訓子府左岸築堤が完了	
	1960 (S35)	常呂川常呂改修事業所に変更し、北見詰所となる	
第2期北海道総合開発計画 (昭和38年～昭和45年)	1964 (S39)	常呂川水質基準が決定される	
	1967 (S42)	北見詰所が常呂川北見改修事業所に変更される 常呂川が一級河川に指定される	
第3期北海道総合開発計画 (昭和46年～昭和55年)	1968 (S43)	鹿ノ子ダム予備調査を開始	
	1971 (S46)	端野左岸築堤が既成完了	
	1973 (S48)	上常呂右岸築堤が完了	
	1975 (S50)	鹿ノ子ダム建設工事を開始	
	1978 (S53)	無加川右岸護岸工事が完了	
	1979 (S54)	上常呂左岸築堤が完成	
第4期北海道総合開発計画 (昭和57年～昭和61年)	1983 (S58)	鹿ノ子ダムの竣工式が行われる	
	1986 (S61)	常呂川第1頭首工、林友橋が完成	
	1989 (H 1)	常呂川第2頭首工に着手(平成10年完了)	
	1990 (H 2)	北見市において桜つつみモデル事業認定(平成4年完了)	
	1993 (H 5)	福山右岸築堤(漏水対策工)着手(平成11年完了)	
	第5期北海道総合開発計画 (昭和62年～平成3年)	1994 (H 6)	訓子府町において桜つつみモデル事業認定(平成10年完了)
		1996 (H 8)	戸戸町において桜つつみモデル事業認定(平成11年完了)
		1997 (H 9)	河川法改正
		1998 (H10)	河川管理用光ファイバーネットワーク事業着手 端野橋架替工事着手
	第6期北海道総合開発計画 (平成9年～平成15年)	2001 (H13)	オホーツク水防公開演習
2002 (H14)		第二期水環境改善緊急行動計画 (清流ルネッサンス )に選定	

網走4河川治水事業概要より